



TITLE:

鮮・満・支の旅行記(II):天界176號  
の續き

AUTHOR(S):

山本

---

CITATION:

山本. 鮮・満・支の旅行記(II):天界176號の續き. 天界 1938, 18(208):  
320-325

ISSUE DATE:

1938-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167694>

RIGHT:

## 鮮・滿・支の旅 行 記 (II)

(山 本 生)

〔天界176號の續き〕

1935年10月16日〔水曜〕 長く御厄介になつた横瀬氏宅を辭し、諸氏に見送られて8時15分京城驛を發し、北上する。前日、開城に下車して滿月臺や瞻星臺を見るやう切りに勧められたけれど、時が無いので割愛、14時に平壤着、ホテルに荷物を置いて、直ちに牡丹臺へ車を飛ばし、博物館に小泉館長を訪ねた。館長は主として樂浪や江西面から發掘された物の實物や、寫眞について説明せられ、殊に四神(朱雀、白虎、青龍、玄武)や天人、鳥、等の起源論について教へられる所が多かつた。

日暮れ頃、乙密臺あたりの景を賞し、又、市街を散歩して、宿に歸る。

10月17日〔木曜〕 朝早く7時38分に平壤發、車中讀書したり、窓外の景を眺めたりしつつ行く。11時30分、鴨綠江の鐵橋を渡り、安東に着。標準時を變へ新しく11時0分出發する。此の地點での時刻變更が愚の至りなのだ!!

滿洲の地に入つて、山々の鋭い outline と、沿線の古戰場とは、いつもながら旅情を刺戟すること甚だし。

16時20分、奉天着。伊東山下其他諸氏に迎えられ、下車して大黒旅館に荷物を置いた後、晚餐を饗せられ、日没後、醫大學生 YMCA のグループに招かれ2時間ばかり座談。其の間に少しく現下の思想的動きの模様をきく。

10月18日〔金曜〕 朝7時5分に奉天發。柳條溝や北大營のあたりを窓外に眺めて、初めての鐵路を北上する。14時、活氣横溢の新京に着。多くの人々に迎えられ、一旦ヤマト・ホテルに入る。

少憩後、早速總務廳の車に乗せられて、滿鐵地方部、滿洲國務總廳、文教部、實業部等を歴訪。かねて、明日以後のプログラム等協定する。

10月19日〔土曜〕 朝、藤山局長の來訪を受け、それから國務院、觀象部、軍司令部等を訪ひ、14時にはクラブで官廳有志のグループに圍まれて、天文時事を主題とした座談會の催しがあり。16時過ぎ、軍司令部に西尾參謀長を訪ふ。18時から、恰も來滿中の山田城大總長等と共に文教部大臣主催の歡迎晚餐會

(ホテル内)に招かれ、後、21時頃まで数談。

**10月20日〔日曜〕** 朝10時、日基督教會で禮拜式に列し、説教、午餐後、國務院のカ―で郊外をドライブし、建築中の中央觀象臺や、南嶺の古戰場などを見る。

19時、公會堂で地方部主催の學術講演會に臨み、約一時間、「近代の天文学觀」を講演した。

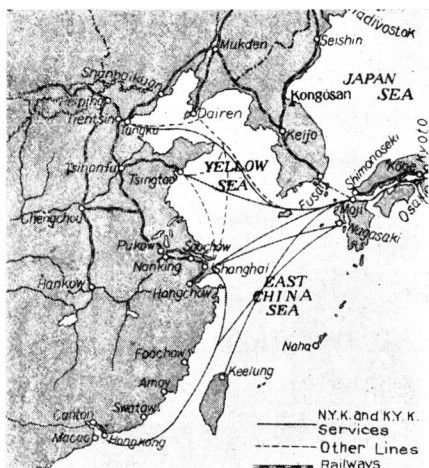
21時、宿に佐藤俊男上尉來訪。いろいろ天文臺計畫など談話す。

**10月21日〔月曜〕** 朝9時0分發の上り列車で新京を去る。佐藤氏等が見送られた。車の外は先日見た景色である。

自分の行く先が北平なので、乗り換へのため13時38分に奉天驛着。20分ばかり驛の構内で時間待ちをしてゐる間に、偶然にも東京の小口亮君が同じ驛の待合ひ室に休んでゐるのに會した。同君は先月東京で久しぶりで會つた時の話しの通り、今、シベリヤ鐵道によつて歐洲へ行かれる途中であるが、彼我共に誠に短かい時間に此所で待ち合はせて、又、會はうとは意外であつた。

北京行の汽車は14時出發した。滿鐵に比べて可なり見劣りのする車である。今日は日本人の車掌であるといふ。沿道の景色は平凡であるが、峨々たる山々が暫く右の車窓外に見えた。國境の“山海關”驛で永く停車したのは日没後で、22時頃であつたが、月の無い夜で、星のみが多く、萬里の長城の起點も闇の中で、見えなかつた。山海關發車と共に寢臺に入つたが、危く落ちさうなので、心配しながら眠る。

**10月22日〔火曜〕** 朝6時頃、天津の東驛らしい大驛に着いたのを床の中で知つたが、起きて見なかつた。北京城に汽車が近づく頃、即ち8時過ぎから珍しい景色に緊張したが、豫定の如く9時45分に停車場に着。清永安二氏に迎えられ、取り敢へずホテルに入る。



恰も大阪の秋守常太郎氏も同じ宿に居られるので、二人共に清水氏に案内して頂くこととし、11時頃、車を雇つて、市の西北の萬壽山に向ふ。さすが聞



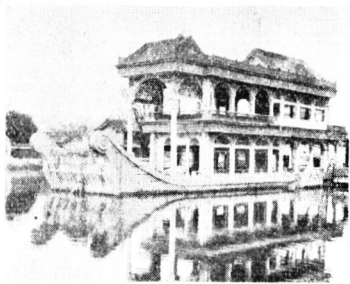
萬 壽 山

きしに優る大規模の構へで、清朝の皇帝や西太后の夏宮として用ゐられた頃の榮華のほどが思ひやられる。宮殿の上層の所で、持参した辨當を食べつい、清水氏から御得意の支那政局談を聞いたが、誠に人と所とを得たやうに思ふ。歸途、清華大學と燕京大學の内外を一巡した。

夕刻、宿に歸つて、少憩後、貢院六條一號の清水氏を訪れ、久しぶりで同夫人にも御目にかゝつた。九時頃、獨りで宿からあたりを散歩して見た。

**10月23日〔水曜〕** 今日、やはり秋守氏と共に、清水氏の案内で、三つの人力車を走らせつい、先づ紫禁城内を見、次いで外交官街の帝國大使館や、東市場等を訪れ、正午にはグランド・ホテルで食事し、其の後、ロクフェラ1財團經營の病院を參觀した。それから、東の城壁にある觀象臺を訪れたが、臺長氏は南京へ出張中で不在で、あつたため、只、場内の陳列品を！通り見たのみであつたが、しかし城壁上に風雨に曝されながら陳列してある三百年來の此の有名な天文觀測器械の種々のものを、幾度も繰り返し眺めた。工作の精密さに驚かされる。

觀象臺からの歸りに又清水氏宅によつた。夜は又案内されて繁華街を見た。今日、宿へ北京大學工學院長張氏が來訪せられた。



紫 禁 城 内

**10月24日〔木曜〕** やはり三人で車を連ねて、朝八時半まづ日本大使館を訪ね、清水通譯官と種々日支文化交歡等に關する話しをした。それから北平大學工學院を訪ねた。院長張貽惠氏は京都帝國大學の出身で、自分の同窓なので、

特になつかしく、張院長も喜んで内部を丁寧に案内してくれられた。次で、國立の圖書館を訪ね、楊館長に會ひ、有名な四庫全書など見せられた。すべて米國式の贅澤さである。それから宮城外苑を通り、偶々雨ざらしになつてゐる大きい日時計を見た。

18時半、宿へ濱、遠山兩氏が來訪された。兩氏共に日本から當地に研究のため留學中の人々である。再會を約して歸去された。自分は清水氏につれられ、19時に YMCA を訪れ、歸りに東安市場を見て、書物を若干買った。

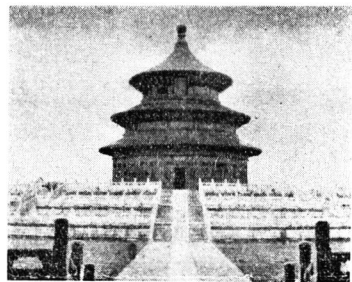
北京は聞きしにまさる大都市で、宮殿の美觀も立派であるが、市街至る所に清朝文化と滿洲・西藏・蒙古・西域等の外域文化の混交が見られ、又、歐米の文化も可なり入つてゐる。しかし、今は政治の中心では無くなつたため、又、商工業の都市ではないため、意外に空氣は清澄で、靜肅で、平和で、恰も我が京都の現在と將來とを暗示する如く、純然たる精神文化の都會である。夜も亦、繁華な街路があるに拘らず、市中に於ては微光星までが明瞭に見えて、實に心地が良い。

10月25日〔金曜〕自分が雇ひつけてゐる車夫は一寸英語もわかるし、お互ひに氣心も知れたので、今日は清水氏たちと別れ、獨りで大使館や銀行を訪れた。それから、濱氏に案内されて東方文化研究所の北京精神文化研究所を訪れ、橋川時雄氏に面會し、内部の書庫等を參觀した。

午後は、清水氏を訪れ、夫人に案内されて、清水氏經營の崇貞女學校を參觀した。

夜は、又、秋守氏と共に、清水氏に案内されて市街を見物し、ジンギスカン料理といふのを頂いた。其の歸途、清水氏と二人で種々話した。

10月26日〔土曜〕今日は北京大學の張工學院長に態々案内されて、朝九時半に宿を出で、孔子廟、ラマ寺、北海、  
燕京大學教授陳在新 食事後、天壇、  
等を見た。天壇は今四五百の人夫を使つて大修理中である。自分は北京見物の初日に感

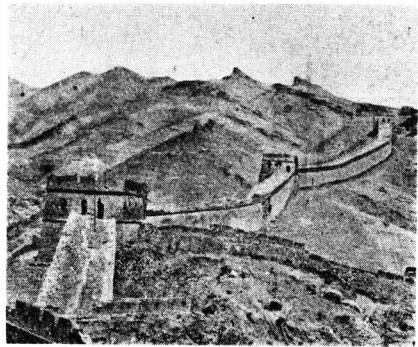


孔 子 廟

じたことであるが、北京にあるものは、政治社會の不安のためとは言へ、餘りに汚れてゐる。之れ等を美しく塗り直したり修復したならば、市街は數段と美しくなるだらうと思つてゐる。今日、天壇の修理が數萬圓を費して行はれてゐるのを見て、北京市長を賞讃する心持ちになつた。

19時から東興樓で自分の歓迎晚餐會が開かれ、張貽惠(北平大學工學院長)、馮簡(同院教授)、文元模(師範大學)、馮祖荀(北京大學——京大出身)、清水安三、李書華(北平研究院)、陳有豐(早稻田大學出身)、趙進義(師範大學——リロン大學出身)の諸氏が出席された。何れも當地に於ける理學系統の學者たちである。

10月27日〔日曜〕 今日又三人で、朝早く宿を出で、北京停車場から西北行の汽車に乗つた、休日で、男女大學生等が大勢遊びに行くらしく、騒々しかつたが、正午頃南口驛着、それから馬を雇つて萬里の長城を見に行つた。之れも支那の名物として、世界的に有名なもの。幸ひに天氣も、氣候も良く、充分に見物をした。秋守清水兩氏は之れから長い旅行に出られるので、自分は獨りで元の汽車線により北京停車場に歸り、夕刻までに宿に歸つた。18時から YMCA の人々の主催による歓迎會に招かれ、玉華臺南飯館に赴いた。



萬里の長城

10月28日〔月曜〕 北平大學の求めにより工學院で、午前中、學生一同に天文學の講演をし、幻燈畫を三四十枚見せた(英語)。清水夫人も來聽せられた。

北京巡覽も一通り終つたので、15時05分、“上海行の特急列車”に乗つて北京停車場を出發、張院長及び清水夫人が見送られた。17時59分、天津の東停車場に着。吉田、武藤兩氏に迎えられ、常盤ホテルに入つた。夜は吉田氏に招かれロシア料理を頂く。席上、天津の天文學上の意義について所信を述べた。

10月29日〔火曜〕 武藤氏に案内されて、朝、YMの陳氏を訪ひ、次いで軍司

令部、郊外廣場、其の他、賑はしい街路をドライブし、一巡して、13時、白河頭で天津丸に乗船、大連へ出帆した。

17時12分、3秒以上にもわたる緑閃光を西の水平に見た。20時就床。

10月30日〔水曜〕朝早く眼がさめたので、日の出の緑閃光を見守つたが、6時分20頃、最初から赤く染まつた太陽が突然と現はれて了つた。

船は10時に大連に着。稻葉、磯部兩氏に迎えられ、まづヤマト・ホテルに入り、それから磯部氏に案内されて滿鐵資源館を參觀した。此所には東蒙古の烏珠穆秘にて發見されたと傳へられる 68.868 匁の隕鐵があつた。寸法は  $42 \times 24.5 \times 21$  匁で、比重は 7.89 とある。

午後、渡邊精吉郎氏、夕刻に牧健二氏來訪。

10月31日〔木曜〕今日は獨りで朝からバスで旅順に行き、長時間にわたつて博物館を參觀した。以前に來遊した事があるので、古戰場は今日は見なかつた。

午後、稻葉、赤木兩氏來訪。

11月1日〔金曜〕今日は少し天氣が悪く、曇りで、風も強かつたが、將來の天文研究計畫のために必要と感じたので、朝からバスで金州へ行き、城内城外の地勢等を一覽した。

夜は YMCA で“文化と天文學”と題する講演をした。

11月2日〔土曜〕午前中、稻葉氏の案内で滿鐵本社へ行つた。松岡總裁は新京出張で不在だつたが、大村副總裁に面會し、標準時問題について健言した。

10時、吉林丸で出帆する。風も浪も強い。

11月3日〔日曜〕船中。

11月4日〔月曜〕朝7時、門司着。武藤氏に迎えられ、暫く同氏宅に休んだ後9時15分下關發の汽車に乗り、京都に歸る。(をはり)

### 山本博士より第1信

来る8月上旬にスエーデン國ストックホルム市で開かれる、國際天文同盟第6回總會へ黃道光初代部長として出席の山本博士は、去る6月19日(日)18時20分永川丸にて横濱港を出航、7月2日(土)正午桑港へ上陸され、本日桑港にて投函の「天界」原稿が編輯部へ到着しました。「歐米再遊日誌」を來月號より掲載します。(7月22日印刷中に)